

国立京都国際会館

所在地 京都市左京区
用 途 会議場
竣工年度 1966年
所有者 財)国立京都国際会館
設計者 ㈱大谷研究室
施工者 大成建設㈱
維持管理者 財)国立京都国際会館



〔審査評〕 昭和41年に竣工した京都国際会館は、宝ヶ池を前に比叡の山並みを背景に、静かで落ち着いた雰囲気漂わせている。周囲の自然と調和し、風格を感じさせる風情は、台形断面を基本にし、水平線を強調した建築の形態と素材感を表現した外装によるものである。

内部は2,000人の総会議場をはじめ数十人の会議室まで、幾つかの会議室やロビー、執務室、その他の部屋が、台形と逆台形の組合せによって、それぞれ個性的にしつらえられ演出されている。また、宝ヶ池と連続するように設けられた池には浮橋がかけられ、おおらかな趣きで、茶亭やのびやかな回遊式庭園と共に、周りの大きく広がった空間のスケールによく調和している。内部外部にわが国の伝統的雰囲気を醸しだし、全体に四半世紀の時の経過をいい意味で感じさせる優れた施設である。

台形の組合せは難工事の極みであったようだが、施工者はよくその工事を行い、大胆でかつ繊細な空間の造形を成功に導いている。それでもさすがに竣工後数年の間は、管理者と共に屋根防水等補修工事に努力したようだが、その甲斐あって、その後は安定している。骨組、屋根・外壁、手摺など外回りを覆っているプレキャストコンクリートは、この地の寒気にもよく耐え、年輪を偲ばせている。

この施設は官庁建物の中でも国際会議という最も重要で華やかな行事に用いられるためか、時代の要請する施設の拡充や設備の機能更新、内装家具の改修及び清掃などが着実に実行されている。その際、原設計者との打合せを十分行っている事も手際よい。特にスロープ等身障者対策やスプリンクラー等防災施設の適及措置が、初期の空間の質を壊すことなく納められている点は特筆すべきことであろう。

施設の維持保全は会館施設部によって誠実に実行されているが、それは詳細にわたり明文化された維持保全計画の基準、仕様書、特殊部分清掃の特記仕様書などによっている。修繕記録も丁寧である。官庁建物だけに確実な面もあるが、その実行のノウハウを含め広く普及することが望まれる。

以上、当初の高い建築の質を多年にわたり維持保全されている努力と実績は高く評価される。